

本論文は、中国の事例を抑止の観点から、抑止の認識と行動に関する中国独自の枠組を解明し、中国の軍事介入の要因を事例研究により明らかにすることを目的としている。

なぜ国家は国境や境界を越えて軍事介入をするのか。歴史上、国際政治の実務上、そして学術上も、大きな犠牲を払った戦争やその後の冷戦という紛争を通じて、防衛、抑止、同盟、危機管理など各国の安全保障政策に応用可能な理論や政策が生み出された。国際社会において、国家が自国の安全保障に努め、抑止により相手の介入や侵略的意図を未然に防止しようとしているにもかかわらず、軍事介入は生起する。どのような状況で抑止が機能するのか、抑止理論を再考する必要がある。

事例研究には、朝鮮戦争、第1次から第3次台湾海峡危機、ベトナム戦争介入および海上紛争の事例を取り上げた。

第1章は、国家安全保障における抑止の概念と理論の変遷について考察し、抑止理論の問題点として、「抑止概念の相違」、「現状認識の相違」および「心理的要因の軽視」の課題を挙げた。同様に、抑止政策と戦略の変遷についても考察し、政策および戦略上の問題点として、「抑止国と被抑止国の間での抑止を機能させようとする状態の認識の相違」、「現状認識の相違」、「前提とされる合理性」および「信憑性」の課題を挙げた。これらの課題、特に、中国の抑止が「強要」などの軍事力行使を含むことを踏まえた上で、第1に、中国の軍事戦略と抑止の位置づけ、第2に、中国の抑止の文脈における現状認識の2点を明らかにする必要性を提示した。

第2章は、中国の軍事力を理解するため、「中国の軍事力の影響力」、「中国人民解放軍誕生の背景と特性」および「中国の軍事力と国家安全保障」を考察し、中国が軍事力を自国の安全保障のために最大限に使用してきたことを述べた。次に、中国の軍事戦略を理解するため、「中国の基本戦略」、「軍事戦略の方針「積極防御」、「中国の軍事戦略の変遷」および「中国の軍事行動」を考察し、情勢に応じて中国が軍事戦略を変更してきた過程でも、毛沢東時代に確立した「積極防御」の軍事戦略方針が堅持されてきたことを述べた。さらに、中国の軍事戦略方針である「積極防御」における「抑止戦略」の位置づけを考察した結果、建国以来の仮想敵国が米国であること、そして、中国の抑止は、中国の「戦争をもって戦争を制止する（以戦止戦または以戦制戦）」という戦略文化が大きく影響していることが明らかである。

第3章は、中国が何を何から抑止をするのかという問題に関わる現状認識について、個人または集団の「価値」に関する参照基準となる境界を意味する参照基準点を明らかにすることを試みた。理論上、価値が参照基準点の「外側」にある場合はリスク回避的、「内側」にある場合はリス

ク受容的になる傾向がある。中国の長い歴史から、参照基準である中国の国境認識を明らかにするために、中国の地図、指導者の発言および国境に関する条文と関係条約を考察した。その結果、朝鮮半島、インドシナおよび東シナ海は、中国の参照基準点の「外側」、台湾および南シナ海については、中国の参照基準点の「内側」にあることが明らかとなった。

第4章は、朝鮮戦争における中国の軍事介入を分析した。朝鮮戦争における中国の抑止戦略としては、第1に、朝鮮戦争への軍事介入により、欧米諸国による中国への侵略を抑止し、第2、軍事介入の時期と手段を慎重に選択することによって米国との全面戦争を回避し、第3に、第3国のためではなく中国自身の国家安全保障のための抑止を機能させたことが評価できる。

第5章は、台湾海峡危機における中国の軍事介入を分析した。第1次から第3次台湾海峡危機の過程における中国の抑止戦略としては、第1に、中国の沿岸諸島への軍事介入や近海での軍事パフォーマンスにより一部の島を攻略した上に、国民党政府の大陸反攻や台湾独立を阻止したこと、第2に、明らかに中国よりも強大な米国による対中国強硬策にもかかわらず「二つの中国」の現実化や台湾の独立を阻止したこと、第3に、朝鮮戦争に続く台湾への攻略計画にあたり、中国は米国をけん制しながら、「積極防御」の軍事戦略方針の下、危機の全局の観点から、攻勢から防御、防御から攻勢へ適時態勢を移行させながら対処したことなどが評価できる。

第6章では、中国のベトナム戦争への軍事介入を分析した。ベトナム戦争への軍事介入における中国の抑止戦略としては、第1に、戦争の様相を極めて慎重に判断して防衛協力という方針を適切に実行し、米国との全面戦争を回避したこと、第2に、核実験を成功させ米国の核戦略における存在感を示したこと、第3に、軍事介入をしながらも対話継続の努力をし、以後の米中接近につなげたことなどが評価できる。

第7章では、海上紛争の事例として南シナ海における米中対抗を分析した。南シナ海における中国の抑止戦略としては、第1に、強大な米軍に対して徹底的に防御の態勢を維持しエスカレーションに至らなかったこと、第2に、将来的な抑止戦略のための中国海軍の増強とともに、海洋総合力を強化する方針を採用したことなどが評価できる。

以上の分析の結果、中国が中国共産党の正統性を持つ範囲を参照基準点とし、米国という大国に対して主権を守るために軍事行動を起こしたことが明らかとなった。中国は、「積極防御」の軍事戦略方針の下、軍事力が強大な米国に対し、決して自国から戦争を発動せず、防御から攻撃に転じることを試みた。その際に、決して、自国の主権の及ぶ範囲を戦場とせず、敵の侵攻を防いだ。明らかに軍事力が強大な相手に対しては、抑止の手段として、「戦争を以て戦争を制する」という戦略文化を実践に応用していった。その応用の過程では、「戦争」という手段ではなく、「実践」という軍事手段を以て、相手を抑止した。つまり、相手を説得するための「軍事的実践を以て侵略を防ぐ」という中国独自の抑止戦略である。